

幼児を対象とした 子ども服の安全講座

田近 秀子 Tajika Hideko

公益社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会(NACS) 標準化を考える会代表
身の回りの安全を高めるために、製品の品質や安全性について消費者の視点で取り組んでいる。

消費者教育 実践事例集

NACSの有志会員による研究会「標準化を考える会」は、“ばらばらで不便なものを、一定の取り決めに従って統一していく”標準化という方法を使い、社会の課題を解決することを目標に2008年より活動しています。例えば、製品の安全性について、消費者の声を反映した基準作りに参画しています。

子ども服の安全規格制定への 取り組み

子どもは自ら危険を回避することは難しく、子どもの死亡原因の上位は、長年「不慮の事故」です。私たちは子どもを事故から守るために、子ども服に付いているひもとフードの危険性に着目しました。首回りや足元に付いているひもは、何かに引っかかると首が絞まったり転倒するおそれがあります。2010年よりさまざまな調査研究(市場調査、事業者団体への聞き取り、

保育現場の調査、企業へのアンケート)を進め、海外では既に制定されていたが、日本にはなかった「子ども服の安全規格制定」を提案し、2015年末に子ども服のひものJIS規格ができました。JIS L 4129 (よいふく)という、大変覚えやすい番号がつけました(図)。

図 高校生がイラストを描いた
JIS L 4129リーフレット*1



子ども服の安全講座

この活動を始めて以来、長い間「子ども服の安全性」について親子等に情報提供や啓発を行ってきました。2018年からは神奈川県消費生活課の依頼を受け、幼児を対象に「子ども服の安全講座」(以下、講座)を、保育園・幼稚園等で行っています。講座は(一財)ニッセンケン品質評価センターとも協同し、「高視認性安全服(光る服)」の有用性の普及も兼ねています。高視認性安全服とは、昼間に目立つ“蛍光生地”と、夜間に光が当たるとよく光る“再帰性反射材”を1つの衣類に取り入れたもので、交通事故から子どもを守るために有効です。

1 講座のねらい

製品に起因する事故を軽減させるためには、安全に配慮した製品を選ぶ目を養うことが重要です。園児が実際に子ども服を「見て、触り、考える」体験を通して、子ども服のひもやフードの危険性を実感し、自分の身を守るための知識を得ることにポイントをおきました。さらに、園児だけでなく、保護者や祖父母等にも理解してもらうために、保護者会に合わせて情報提供および啓発のための親子講座も行いました。

2 講座の内容・進め方

講座のひな型を作り、各園との打ち合わせを十分に行い、特徴・要望に合わせて時間割を毎回作成しました。プログラムは表のとおりで、特に③のグループワークに重点をおいた体験型学習となっています。

*1 リーフレットは経済産業省ウェブサイトからダウンロードが可能(ただし、イラストは本稿掲載のものとは異なる)。
https://www.meti.go.jp/publication/pdf/pamph_kawaii.pdf

写真1 紙芝居の読み聞かせ



写真2 子ども服を見て触って話し合う



表 講座のプログラム

はじめに	今日学ぶポイントを示す
①危険性の説明	オリジナル紙芝居の読み聞かせで、裾のひもが自転車に絡んで転ぶなどの事故事例を紹介する(写真1)
②危険性の発見	ぬいぐるみに危ない服を着せ、首のひもが遊具に引っかかるなどの事故事例を体感させる
③グループワーク	5~7人ずつのグループを作り、各グループに危ない服6着と、安全な服(ひもやリボンがイラストで描かれている)1着を用意、見て触って危ない点を話し合う(写真2)。続いて、クイズ形式で「どこが危ないか、どうして危ないか」を問い、気がついたことを園児に発表してもらう
④光る服体験	特殊なメガネを使い、高視認性安全服が光るようすを観察してもらう
最後に	今日学んだこと、分かったことを共有する

3 講座実施に当たり工夫した点

さまざまなプログラムを用意し、クイズなど遊びの要素を取り入れ、園児が飽きずに主体的に参加できるように工夫しました。

また、中学生が協力して作成した紙芝居や、子ども服の実物を使い、視覚で理解できるように工夫しました。これはまだ言葉を理解できない園児にも効果的でした。外国にルーツのある園児が半数いる保育園では、事前の打ち合わせで職員から、「紙芝居や子ども服の実物など視覚に訴えるのは言葉が理解できなくても効果的」とのアドバイスを受けました。その結果、日本語が分からない園児や保護者も、実物を見ることで理解できたようすでした。

4 講座実施による効果

2018年から2020年2月までに、親子講座も含め合計13回の講座を実施し、延べ園児487名、保護者67名が参加しました。

ひもがプリントされたTシャツを指し、「これはひもの絵だから危なくないよ」と指摘したり、自分が着ていたズボンのひもを指し、「後でお母さんに教えて取ってもらおう」と発言する園児もみられました。さらに、親子講座では、自ら保護者にひもの危険性を説明している園児もいました。子どものみでなく、子どもから保護者へ情報発信することが確認できたことは大きな収穫です。幼児期からの消費者教育の重要性・可能性を改めて認識しました。また、子ども同士で話し合い、気づいたことや意見を皆の前で発表した体験は、小学校入学後も大きな力になると思われます。

園からは、「服に興味を持ち、家でも話し合うきっかけになった」「講座の後のお散歩で、『ひもがあるから危ないよ、フードは襟の中に入れて』など、習ったことを実践していた」などの感想が寄せられ、子ども自ら危険性を回避する姿が見られ、講座の意図が伝わったことが確認できました。

今後も広く展開するために

東京でも講座開催の要望があり、実施しました。今後、より広く展開するために、予算の確保や、講座案・教材の改善を図りたいと思います。ぜひ皆さんとの連携を願っています*2。

*2 NACS標準化を考える会 <http://nacs-east.jp/kenkyukai/hyoujyunka.htm>